

「学長のことは」

2026年3月17日

学長 中野 敬一

本日、神戸女学院大学をご卒業される皆さん、大学院を修了される皆さん、おめでとうございます。また、ご家族、ご関係の皆様、本日は誠にありがとうございます。心よりお慶び申し上げます。

卒業生、修了生の皆さんは、日々研鑽に励み、本学所定の課程を修められました。その努力を称えます。本学での経験は、これからの人生を確かに支えてくれることでしょう。自分に蒔かれた種が、やがて成長し、さらに大きく花開くときを信じて歩いてください。

卒業される皆さんに、私から言葉を贈ります。

まず一つ目は、「リベラルアーツ」についてです。現代社会は、めまぐるしい変化のただ中にあります。とりわけAIの進歩は、価値観や働き方、学び方にまで影響を及ぼし、これまで「当たり前」とされてきた常識を揺さぶっています。数年後の社会さえ予測が難しい時代となりました。

社会が複雑さを増すほどに、物事を多面的に捉える力が求められます。専門性のみならず、幅広い知識と柔軟な思考が必要とされる今、リベラルアーツ教育の価値は一層高まっています。

皆さんは、その学びを積み重ねてこられました。悩んだとき、行き詰まったときには、どうか「リベラルアーツ」という言葉を思い起こしてください。多様な視点から物事を見る力は、複雑な社会を見極め、自ら判断する力を育てます。何が真実なのか見えにくい時代だからこそ、自らの目で確かめ、自らの頭で考える姿勢を大切にしていきたいのです。

偏見や誤解から自由であり続けてください。

リベラルアーツとは、一つの価値観に縛られない知的な自由を育む学問体系です。「人間とは何か」「社会とはどうあるべきか」といった根源的な問いを持ち続ける姿勢こそ、これからの人生を支える確かな礎となるでしょう。これは、女子教育が長い歴史の中で求め続けてきた精神でもあります。

歴史を振り返れば、女性は長く「こうあるべきだ」という価値観を押しつけられてきました。本学の創立者の一人イライザ・タルカット先生が日本に来られた当時、女性は男性の後ろをうつむいて歩く

ことが当たり前とされてきました。そのような時代に、タルカット先生は女性たちに向かって「背筋を伸ばしなさい」と語りかけました。その言葉には、自らの尊厳と可能性を信じて歩いてほしいという強い願いが込められていました。

それから150年を経て固定観念は少しずつ解かれつつありますが、なお道半ばです。残念ながら現代社会には、いまだ女性への差別や偏見が存在します。社会に出て、皆さんがそれを実感する場面もあることでしょう。それでも、自分で考え、自分で選び、自分で生き方を決めることの大切さを忘れないでください。皆さんお一人おひとは、かけがえのない大切な存在なのです。

私たちは、どのような社会を目指すべきかを、改めて問い直さなければなりません。かつて、キング牧師が述べたように、すべての人がいかなる属性にも縛られず、その人格によって評価される社会こそ、私たちが進むべき方向でありましょう。

二つ目に申し上げたいのは、本学院の永久標語「愛神愛隣」についてです。この言葉は、助けを必要とする人の隣人となりなさい、困難な状況にある隣人を支えなさいという意味を持っています。

本学院の宣教師は、この精神を自ら体現されました。助けを必要とする人々に寄り添い、支え続けたのです。そして学院で学ぶ者たちにも、この精神を携えて社会に出て行ってほしいと願われました。その願いは今も同じです。

とはいえ、「隣人を助けなさい」と言われても、難しく感じられるかもしれません。けれども、隣人を助ける行いは、必ずしも大きな力を必要とするものではありません。

私は、その一つの形が「応援する」という、誰にでもできる働きかけであると考えています。応援とは、相手の存在を認め、その歩みを信じ、そっと背中を押すことです。その一言が、人を再び立ち上がらせる力となることがあるのです。

皆さんと直接関わる機会は、これから少なくなっていくかもしれません。しかし、私たちはこれからも皆さんを応援し続けたいと願っています。その応援を「祈り」という形に変え、心を込めて皆さんをお送りいたします。

卒業される皆さんは、式が終わると、この講堂から巣立っていかれます。私たちは、皆さんのこれからの歩みを祈りつつ、見送ります。どうかこれからの人生が、希望と実りに満ちたものでありますよう、心よりお祈り申し上げます。